

---

# 閑・言（へいごん）

士功征宗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

閉・言

### 【Zコード】

Z2742A

### 【作者名】

土功征宗

### 【あらすじ】

○突如、福原は監禁された。目を覆われ、口も塞がれ、拘束され身動きとれない彼。そこに妙なショータイムが幕を開ける。暗闇に全身の自由と言葉を閉ざされた彼が最後に迎つところとは…著、（、、）ゆ・ 前トキしろづ

## イチワ（前書き）

全四話の連載です。短篇の予定が長くなりましたが。ジャンルはホラーですが、ホラーではないかも。その時はすみません。

## イチワ

暗闇が恐いと言つるのは、個人差があるだろつ。

私達が普段目にする物は、光の造作による人体の芸術作品のよつなもので、様々な才色、形態を映し出している。

では、暗闇には何も“無”<sup>なし</sup>なのかと言えばそうではない。目で確認できないだけで、存在自体消滅（〇）になる事はないだろつ。これを今まさに実感している者がいる。

とある一室に何故か手足を椅子に縛られ、目隠しに猿轡といった、確実に拉致監禁されている男がいた。

彼はサラリーマンで、そこそこ賞利を上げる世論と戦う中堅営業マン。

何の変哲もない日々を過ごしてきただ福原悦雄、三十五歳、独身。好きな食物は納豆に大根卸しとちりめんじやこれをおとしたもの。ルックスはかなり良く、一応そこそこモテる。唯一、人に見せられたい趣味が、テレビへの独り言。特にメンタルニュース。

「まさかあの人が！」

なんて聞くと、

「オメエもだよ！ 偉そうにしゃしゃり出てインタビュー受けているけど、あんたも含め世の中そんな奴ほど人を殺すんだ」

ギヤハハ！

さらに、

「俺は殺つてない！」

と聞くと、

「間違いなく貴様じやー！」

ギヤハハ！ ギヤハハ！

意外にショッパイ奴。

そんな彼にしてみれば、刺激を通り越し、恐怖と絶望に心を打ち

のめされた何者でもなく、目隠しで目の前真っ暗闇で、本人にしてみれば何処に居るのかさえままならないでいる。

この異常な迄の空氣は堪え難い苦痛で、頭の中は変な妄想帶が駆け抜け、なぜか辿り着く考えは、『このまま何もなければいい』という錯覚を起こすが、手足縛られ、目隠しに猿轡された状態で“何もない”では済むはずもない。

案の定、次の瞬間。

「はいドーナンッ！」

突如、彼の近くから声がこだました。

近くで遠いといふのが、携帯のスピーカーから聞こえてくる声。  
「ジャンジャンジャン！今週も始まりましたビッククリビックアリ田隠  
しゲーム」

拘束されている本人にしてみると、馬鹿げた芝居声で笑えないし  
楽しくない。

「はーい！今回も似たもの同士が椅子に縛られて向かい合つていま  
す」

妙な言葉を聞いた。

そう、なんとこの謎の一室には、福原の他にもう一人、確実に拉  
致監禁されている男がいたのだ。

彼らは互いに似たように拘束され、向かい合つている。いや、向  
かい合わされていたのだ。

「さーて、今回君たちが選ばれたのは何故か！ それーはー……」  
間が空く。ふざけた間が空く。

「あんた達は、隠れ肥満ならぬ、隠れ犯罪者だからでーすー！」  
「！」

（何、何言つてんだ！）

福原ならずとも、多少なりの軽犯罪は犯してはいるが、（男なら  
立ち小便など）ここまでされる覚えはない。まして他人に恨まれる  
覚えも無かつたのだ。

「あんたら、処刑！」  
（なんなんだ、なんなんだ、なんなんだ）

福原は思いもよらぬ言葉を耳にし、恐怖と絶望からの憤りを拘束  
された身体全体で表した。

「ゴツツ、ゴツツ！ ウーッウーッ！

身体を大きく震わせ椅子をずらしたり、猿轡からもれるつめき声。  
なんの抵抗にもならない。ともなれば、向かいの男もそうだろう

と思つたら、わりかし静かなもので、物音一つたてていない。

「あーらら、騒いじやダメダメよーん。あんた達の近くにはもう一人、ジャジメーンツーが銃持つて立つてるからヨー。てか、ヨーは飽きたな」

この緊迫感はなんなのか？　“殺す”と脅されているはずなのに、そんな感覚が失せている。だけど、銃を持った男が傍にいるのと、拘束されている現状からくる妙な違和感。

全身から出る汗と、肛門の辺りがヒク付き出している。

そんな時だつた。

天使の濁声が？　近くで遠くから聞こえてきた。

「警察だー！建物は包囲した。大人しく人質を解放しなさい！」

「この一室まで聞こえてくる、拡声器からの濁声。

（やつたぞ！警察だ）

彼らに救いの天使が現われた。

世の中広しと言えど、こんな馬鹿な犯罪はないだろ？。いや、人を苦しめる犯罪はすべて馬鹿げていると言つてもいい。ただ、それが当たり前過ぎる世の中に身を投じてするのが実情だ。

古からの能書きにあるよつて、もし本当に神は自分の姿を泥人形で表わし、この地に這わせたのであれば、将来こんな世を予期していたに違いないのだろうか。

サイダー。それは炭酸飲料水だ。

福原はこんな事を思った。

（警察がくりや助かつたものだ！はやくここから解放されたい。そしたらカラカラの喉を潤すシユワシユワ～を飲みたい！）

もうすでに助かつてている事を想定していた。変なアドレナリンが福原の脳内に染みだしている。

（あつ！やつぱりビールだな……）

それを打ち壊す恐ろしき声。

「デカが来た！！ っと驚いてみる……テヘッ」

（あつ、あれ？警察が来てるのに誰も焦つてないなんて。なんでだ）  
福原の心境は流れる文字の電光掲示板のように、『助かる』が流れていたが、そのブロック体は崩れ落ち、『謎』の文字に変わっていた。

「と、言つことでゲームスタート」

（いきなり何始めてんだよ）

「イマカラ、ナワ、トキカタ、オシエ、マス」

片言口調でさらに馬鹿げたゲームがつづく。

「しんどいな。ああオメエ達によ、縄の解き方教えてやるから、解け！ そんでな、先に解いた野郎が後の奴を殺せ」

（はあ？ なんなんだよ意味わかんねえよ）

いきなり『殺す』から、『殺せ』に変わったのには、動搖は隠せない。

「そんでな、マジック手品用にすぐ解けるように細工してあつからよ、ダイジョブだ！そしたら目の前に一丁、チャ力あるから脳天目がけてぶつ放てえオラア」

結局、切羽詰まつた状況は変わらず、さらに警察が来たことにより、このゲームは早くも幕を開けてしまった。

「それ、まず手首を反してうまく捻つて引け、そんで……（縄抜けのマジックは簡単なものなりば、よくネタ明かししているので省略）」

そんな説明を淡々と進め、福原がその通りに解こうとしたが、  
「はいスタートッ！ フライングはいけません。スタートと言つたら始めるさい。そうしないとジャジーメンツーが一人ともぶつ殺しまーす」

あれ程の説明聞いて、頭では理解しているのだが、いざとなると『我先きに』は否めない。

（はえーよー只でさえ訳解んねえーのに、人殺しの心構えなんか出来るかよ）

心は一分する。

（でも……やらなきゃやられるし、ああどうしたら……）

頭の葛藤と言うのは、本人の慰めでしかない。おそれくは、一卓なら誰でも先に殺すを選択するに違いない。

あえて、自分に言い聞かせているだけだ。“仕方がないことなんだよ”つて。

福原も心は決まっていた。何故なら、

「はーいスタートーー！」

と、同時に直ぐに縄を解き始めたからだ。だが、そんな心を見透かしたように、

「と言つたら始めるんだよ！ ベタに引っ掛からないようにしないとねえ」

（……）

（そんなジョークはもう結構だ。自分の身は自分で守るー 早く銃を、早く殺させろおー）

「犯人からは、なんの応答も無いのか！」

集まつた警察は、何も変わらない状況にヤキモキしだした。

いつのまにか集まつていた野次馬とマスコミのたかり。

「仕方がない。情報提供者によれば、犯人は一人。こちら側に気をそらせて いる内に突入班を待機ポイントまで進める。合図を待つて突入だ」

「はいっ」

その指示により、突入班は建設途中の真新しいビルの中に入り、標的の五階へと掛け上がつた。

入り口は一つ。そこを囲むように待機。

「待機完了。指示を待ちます」

福原はドア一枚隔てた向こう側に、救いの手が差し伸べられた事にも気付くよしない。

そして……

「はい！スタートーー！」

解いた。福原は懸命に解いた。無我夢中で解いたのだ。

「よし、突入！確保、確保だ！」

ドンッ！

突入班の蹴り開けたドアに鍵が掛けられておらず、いとも簡単に開いた。それに紛れて消えた発砲音。

！――！――！

「抵抗するなあ！」

「確保！確保！」

福原は目を丸くしていた。

何故なら彼が繩を解き、目隠しを剥ぎ取つた瞬間見た光景は、何もなく、頭から血を流し倒れていた死体。すでに息は無いように見て取れた。

只、それだけ。携帯は福原本人の物で、小さなテーブルにポツリと置かれていた。

突入班が入つて来たことに動搖し、辺りを見渡したが、ジャジメンツーの姿もなく、只、自分と面識も所在も知らない死んだ男だけだった。

突入班にボコボコにされ、捕まつて、手錠を羽目られても、すべてはスローモーション。

頭の混乱。消沈。

彼は解つていない。

「あつ！犯人が出てきました！カメラ捕らえてる？」

「ああバツチリ撮つてるぜ」

「犯人は何か大声で訴えている模様です」

### 社『営業部』

「部長。お茶が入りましたよ」

携帯電話を気持ちいいほどに音を立てて閉じ、窓の外を眺めていた男は、イスをクルリと回し、

「お茶、ありがとう」

その顔は笑つている。

「何か良いことあつたんですか？北田部長」

「何故？」

「笑つてらつしゃるから……」

北田は、茶をスッと持つと、

「ああ、クライアントからいい返事を聞けたんですね」

「そなんですか！良かつたですね部長」

そういうとお茶を運んで来た社員が自分のデスク戻つていった。

北田は視線を湯呑みの茶に向けると、呟いた。

「実にいい返事だったよ！これで私の部長の座もしばらくは安泰だ。

フフツ

後日、北田の着信が福原の携帯に入っていた事に警察が気付き、北田を呼び事情聴取したが、福原が定時に出社しなかつたので電話をしていたと、電話には出たが無言、それに必死に呼び掛けたと話し、問題なく落着した。

「こんばんわ。ニュースの時間です。今夜のトップは『人質殺害立てこもり事件』の続報で、犯人逮捕後の映像をお伝えします……」

その晩のニュースは各局で福原が取り上げられた。

彼の苦悶の表情は何かに取りつかれているようで、映像の終わる間際まで、彼が叫んでいたのは、

「俺はやつてないぞー！俺じゃないんだあああ

その晩のニュースを見ていた一人の視聴者がデジタル光線の放つ画面の福原に、こう呟いた。

「間違いなくお前だろギャハハ！！」

四角い平面体の画面には、いつしかコンピーターゲームの単調羅列の映像が映し出されていた。

対岸の火事と言うのか、日々淡淡と平穏無事に暮らしている日ほど、人は無常に他人事ですませてしまう。

無論、福原の側には銃はなく彼は殺してはいない。

寧ろ、被害者であつて加害者ではない。

だが、誰もが被害者にも成りうるし、加害者にも成りうる日が来るかもしれない。それが、どんな些細なことであろうとも。

その時は死か？生きて冷たい監獄か？

目の前が真っ暗闇になり、全身金縛りのようになり、言葉も発せ

られない感覚を体験したとき、覚悟を決めてください。

電気を消して寝るときも、一度、自分のいる場所を確認してみて  
はいかがですか……

完

ミンコ・ホラコ（後書き）

読んでいただき有難うございました。特にホラーではなかったですね。すみませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2742a/>

---

閉・言（へいごん）

2010年10月8日15時16分発行